

梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書No. 2、明治図書出版、2010年6月刊を読む(7)

### 開示悟入の教育のために(7)

#### 土台としての雰囲気づくり

1. 教育活動をここで述べてきたような形で工夫していただくと同時に、そうした教育活動が所期の成果を挙げるための土台づくりにも力を入れてほしいと思います。ここで**土台**と言いますのは、**学校の雰囲気**のことです。
2. (1) **良い雰囲気ができておれば、その中で子どもは、知らず知らずのうちに伸びていきます。そして、指導されたこと、活動したことが、着実に身につけていきます。**  
(2) **しかし、雰囲気が駄目であると、せつかく教室でやったことが、教師に指導を受けたことが、実を結ばないままになる恐れがあるのです。**  
(3) **レイテント・カリキュラム(潜在的なカリキュラム)としてこの雰囲気の問題が重視されているのも、このためと言っていいでしょう。**
3. この意味で学校の雰囲気づくりを考える場合、まず第1のポイントとなるのは、「**積極性**」ということではないでしょうか。
4. (1) **子どもも教師も学校の誰もがやる気を持っている、という中であれば、くじけそうになっても、やる気ももう一つということであっても、何とか積極的にやっていけるものです。**  
(2) **お互いが支え合って初めて、弱い人間同士、何とかやっていけるというものです。**  
(3) **ということで、何ごとにも積極的に、前向きに考え、取り組んでいこうとする雰囲気を育てたいものです。人のやること、やろうとすることに難点を言い立て、足を引っ張るような言動が、一切見られないような学校にしたいものです。**  
(4) **世間や教育委員会から批判されないこと、これまでの慣例通りであること、を金科玉条にするような消極的発想を、学校から追放したいものです。**  
(5) **それに「ムリ・ムダ・ムラをなくそう」という合理化のスローガンがありますが、あれも学校という場にはあまり適さないのではないかと、思います。**  
(6) **チマチマした小さな合理性に閉じこもっていたのでは、何もできません。**  
(7) **むしろ、「ムリも歓迎・ムダも結構・ムラはあって当然」といった開けっぴろげで青天井の積極さこそが、勉学の場にはふさわしいのではないのでしょうか。**
5. (1) **第二のポイントは、「相互支持的あるいは受容的」ということです。**  
(2) **お互いに相手を受け入れ支え合う暖かい雰囲気を学校にみなぎらせたいものです。**
6. (1) **理性的であるということは批判的であることである、という思い込みが教育の世界でもまだ強いようです。**  
(2) **だから、つまらぬことにも文句をつけ、異議を申し立てる、という「批判精神」を育てようと躍起になっている教師もいます。**  
(3) **自分の考えと違う意見に対してはとことん議論して、言い負かすべきだ、という感覚の教師も見られないではありません。**  
(4) **しかしこれは、大きな間違いではないのでしょうか。**

7. (1)「黒か白か」ではなく灰色のあいまいな領域を、あいまいなままであっても大事にする態度を育てたいものです。
- (2)また、自分の身方・考え方と大事な点で違っていても、それはそれとして、仲良くつきあっていける能力を育てたいものです。
- (3)小賢しく他の人の非をあげつらうのではなく、自分自身の至らなさの方を省みるといった姿勢を育てたいものです。
8. もう一つ、第三のポイントとして、「けじめ、あるいは秩序感覚」も忘れるわけにはいきません。
9. (1)残念なことに、今の子どもは家庭できちんとして躰を受けていません。
- (2)また、世の中もすべてに寛容になり、何でも「いいよ、いいよ」ですませてしまいがちです。
- (3)学校の教師さえ、言うべきことを全く子どもに言っていない、という声があります。
- (4)こういった諸々の事情のためでしょう、きちんと挨拶のできない子どもが大勢います。
- (5)自分のものの後片付けのできない子どもが大勢います。授業中もおしゃべりをしている子ども、教師の方に意識を集中できないでキョロキョロ、ソワソワしている子ども、が大勢います。
10. (1)子どもを本当に大事にしようと思うのなら、注意もしないで放任していることはできないでしょう。
- (2)後になって困るのは子ども自身でしょうから。
- (3)それに、ザワザワとした無秩序な雰囲気では、誰もが学習に集中できないままになります。じっくりと考え、いろいろ創意工夫していく学校にしていこうとするならば、子どもも教師もそれあんりの秩序感覚を身に付けていなくてはならないでしょう。
11. (1)子どもは周囲の雰囲気に大きく影響されながら育っていきます。
- (2)様々の教育活動も、良い土壌がなくては実を結ぶことができません。
- (3)積極性、受容性、秩序感覚に満ち満ちた学校を、やる気と暖かさとけじめのそろった学校を、何とか創り上げていただきたいと思えます。
- (4)こういう土台ができていけば、「開」「示」「悟」「入」を目指す教育も、豊かな実りをもたらすことでしょう。
12. ここで述べて来た課題を、一つひとつの学校が、そして一人ひとりの教師が、自分のものとして受け止めてくださることを祈っております。

P145 ~ 148

[コメント]

「開」「示」「悟」「入」という尊い考えのもと授業をしようとしても、授業の前提として「積極性」「受容性」「秩序感覚」、つまり「やる気」と「暖かさ」と「けじめ」がなければ授業は成立しない。梶田先生のお示しになられた「授業の成立」の前提条件は有益。大いに学びたい。

— 2012年11月1日 林 明夫記 —